

「アラブの春」でサウディアラビアの女性は民主化を求めたのか?  
Did Women in Saudi Arabia Demand Democracy in the “Arab Spring”?

東京大学  
辻上奈美江

2011年初頭にチュニジアでの抗議行動を皮切りに始まった「アラブの春」は、アラブの権威主義非産油国のみならず、湾岸産油国にも飛び火した。サウディアラビアに波及した「アラブの春」で無視できないのが、抗議主体としての女性であった。チュニジアやエジプトの影響を受け、2011年1月に脆弱なインフラ整備に対する抗議デモを初めて起こしたのは女性であったし、9.11テロ事件直後からテロ容疑者として拘束されたままの家族の釈放を内務省前で訴えたのも女性抗議者だった。さらに、女性たちの運動は自動車運転解禁運動へと展開した。「アラブの春」に際してサウディアラビアでは、東部に居住するシーア派を中心とするデモも展開されたが、それ以外のデモでは女性が中心的役割を担ったと言っても過言ではない。

結社や集会が禁止されているサウディアラビアで、国内の各地に抗議行動が波及したことは注目に値すべき出来事であった。さらにそのような抗議行動において、しばしば社会的・文化的規範のために成人とは看做されない女性が主体的な役割を担ったことは軽視できない。サウディアラビアの例は、たとえば同様に女性がデモに参加したが、軍関係者から「処女検査」を受けるという屈辱的事件が起きたエジプトとは異なる展開となったことを示している。

サウディアラビアの一連の抗議行動について興味深いことのひとつは、民主化（ディモクラティーヤ）や自由（フッリーヤ）または平等（ムサーワー）といった表現が用いられなかったことである。ちなみに同国は2000年に女性差別撤廃条約を批准しているが、高度な車社会において女性による自動車の運転が禁止されていることは間違いなく女性の行動の自由を制限してきた。また、女性の政治参加も男性以上に制限されてきた。このような状況にもかかわらず、女性たちはなぜ、民主化や自由、平等といった表現を用いることなくこれらの運動を展開したのか。またなぜ、政府は女性の政治参加については一定の可能性を約束した一方で、自動車運転については解禁しないのか。そしてより大局的な問題としてなぜ、他の国とは異なり、抗議行動は運転解禁へと向かったの

か。

本発表では、以下の三つのポイントから検討する。

第一は、「民主化」、「自由」そして「平等」について想起されるイメージである。「女性の解放」や「ジェンダー平等」が推進された欧米地域では、女性が男性と「平等に」働くことが求められるが、家事負担は依然として女性の手から離れない二重負担を強いられている。また、自由とはしばしば男女の自由交際と同意であると理解され、「自由」が「無秩序」と曲解されることもある。エドワード・サイードは『オリエンタリズム』で、欧米の人びとがどのようにオリエンタリズムを想起しているかについて批判的に論じたが、他者に対する誤ったイメージが構築・強化される事実は、反対に「オキシデンタリズム」についても当てはまる点について指摘する必要があるだろう。

第二は国家と国民との関係である。サウディアラビアはレント（不労所得）のばらまきを通じた君主制として説明される。今回の「アラブの春」について、レントや君主制はどのような役割を果たしたのか。そしてそれらはジェンダーの視点からはどのように捉えられるかについて論じる。

最後は域内政治や国際関係の観点である。アラブの盟主であり、イスラームの「二大聖地の守護者」たるサウディアラビアとして、一連の女性に関する政策の一部転換はどのような戦略性を形成しているのか、あるいはしていないのかについて検討する。